

特別史跡

# 一乘谷朝倉氏遺跡34

平成14年度発掘調査・環境整備事業概報



福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館



第113次発掘調査区全景(西から)



越前焼掛花生

特別史跡

# 一乗谷朝倉氏遺跡34

平成14年度発掘調査・環境整備事業概報

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

# 序 文

一乗谷朝倉氏遺跡は昭和42年の発掘・整備の開始から今年で36年目となりました。

この間、当遺跡への認識は当初の頃の「戦国村・一乗谷」から、昨今の「戦国城下町・一乗谷」・「中世都市・一乗谷」へと大きく変わりました。また、遺跡は毎年発掘後史跡整備(公園化)が進められ、その上、町並の立体復元もされ、資料館には出土遺物や模型などが展示されて、往時の町並や人々の暮らしの様子がよく理解できるようになりました。

その結果、本年は観光統計によれば一乗谷へは約38万人余の観光客の入り込みがあったと発表されています。たいへんありがたいことです。

ところで、今年の見学調査(第113次)は字木蔵・雲正寺で実施しました。ここは地元の人々が通称「八地千軒」と称している所で、八地谷の入口に当たる場所です。道路に面して武家屋敷が検出され、町割や屋敷跡の様子を解明する貴重な成果が得られました。

一方、環境整備は字斎藤の武家屋敷跡を実施しました。また、中山間地域総合整備事業一乗地区施設間連絡道石垣整備工による石垣補修・芝張・植栽も実施しました。特に後者は分かり易くいえば遺跡内遊歩道で、史跡見学の便をはかるものであって、観光客や見学者に喜ばれるものと確信しています。

ともあれ、本報告書が史跡の研究・整備・保護・啓発などに広く活用されることを祈念します。最後になりましたが、本年度、ご指導、ご協力をいただきました朝倉氏遺跡研究協議会の諸先生方、文化庁・福井県・福井市の関係各位、発掘調査や遺物整理に当たられた皆様に対し厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長 青木 豊 昭

# 例 言

1. 本書は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が平成14年度に実施した国庫補助事業による発掘調査、および環境整備事業の概要報告書である。
2. 本年度は、発掘調査・整備事業「中期10ヶ年計画」の5年度目にあたる。本書には第113次発掘調査の成果および斉藤地区の環境整備の概要を収録した。
3. 本書の作成にあたっては、資料館員の検討・討議を経て、水村伸行が編集を担当した。また、執筆については、各項目毎に分担し文末に文責を記した。

# 目 次

巻首図版

序文

例言

目次

1. 平成14年度の事業概要 .....	3
2. 第113次発掘調査 .....	7
遺構 .....	7
遺物 .....	12
3. 環境整備 .....	22

第1図 平成14年度発掘調査・環境整備位置図

第10図 建物跡整備図

第2図 第113次発掘調査位置図

第11図 土塁石垣補修立面図

第3図 第113次発掘調査遺構全測図

表1 平成14年度事業概要一覧

第4図 第113次発掘調査主要遺構模式図

表2 第113次発掘調査出土遺物一覧

第5図 第113次調査出土遺物 (1)

表3 植栽樹木一覧

第6図 第113次調査出土遺物 (2)

挿図1 SK5100近景 (東から)

第7図 第113次調査出土遺物 (3)

挿図2 SX5112近景 (北から)

第8図 第113次調査出土遺物 (4)

挿図3 SE5139出土遺物

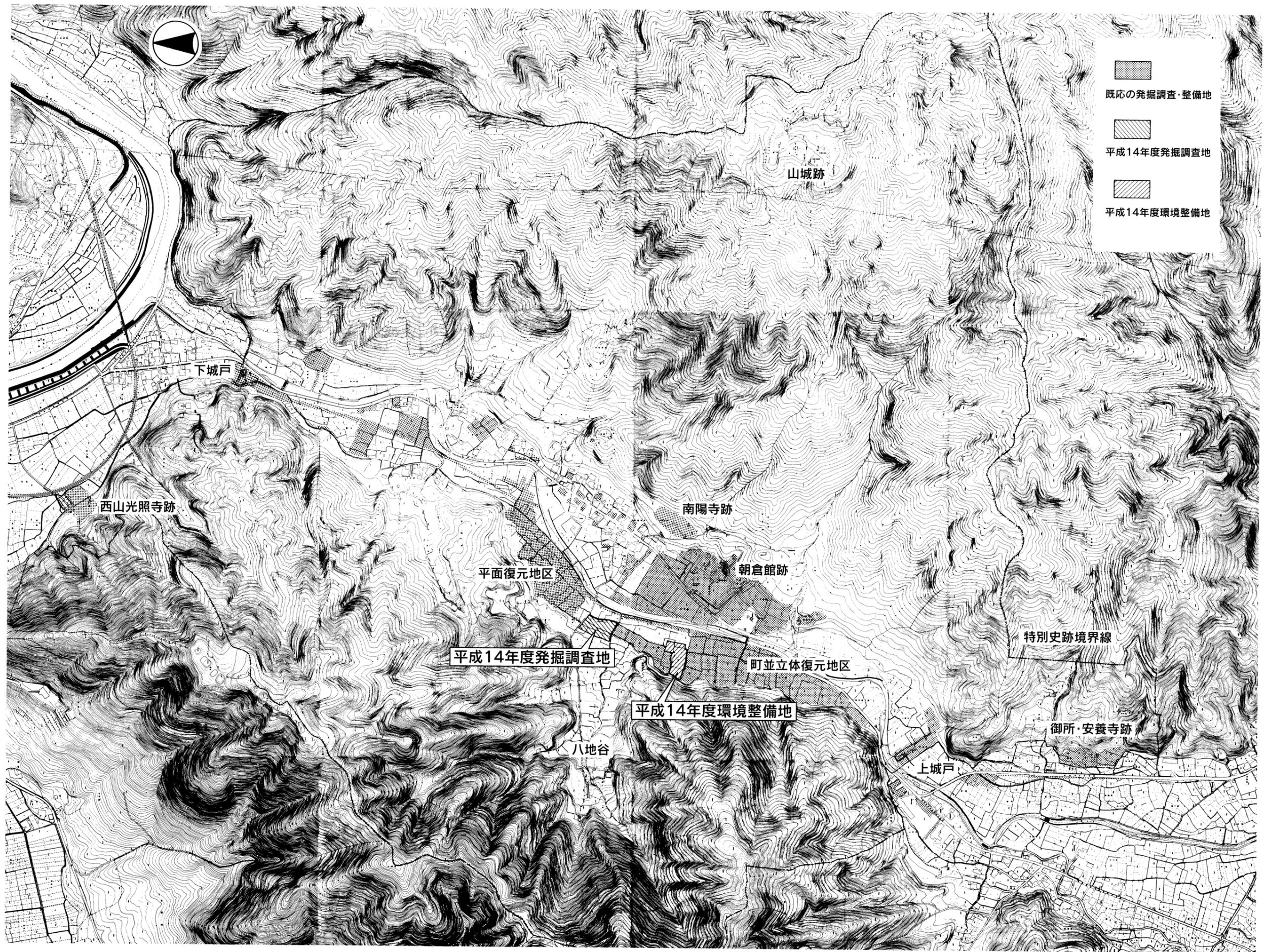
第9図 第102次発掘調査地斎藤整備全体図

挿図4 踏石石樋補修状況

図版 第113次発掘調査区遺構(1~6) ..... PL. 1 ~ 6

同 遺物(1~4) ..... PL. 7 ~ 10

第102次発掘調査地整備工(1~4) ..... PL. 11 ~ 14

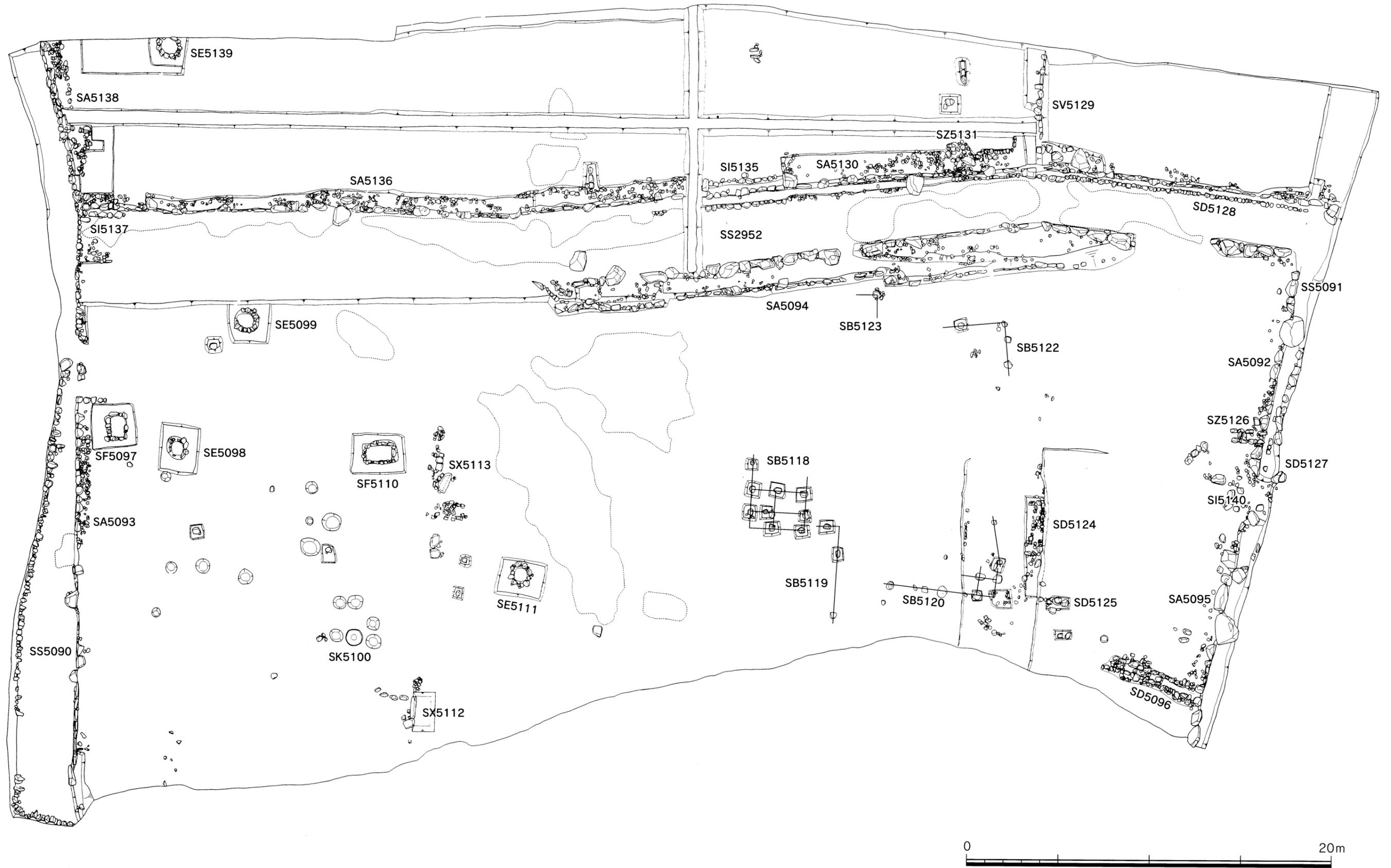


第1図 平成14年度発掘調査・環境整備位置図









第3図 第113次発掘調査遺構全測図

## 2. 第113次発掘調査

平成14年度の発掘調査区は、昨年度におこなった第112次発掘調査区の北側に隣接しており、第112次調査区との間には、本遺跡内を南北に流れる一乗谷川の支流である八地谷川が西から東に流れている。本調査地点より西方へ延びる谷である八地谷地区は、通称「八地千軒」と伝えられているものの、過去においては第19・63次調査において極めて部分的な調査をおこなったのみであり、町割等が不明な地区であった。本地区は昨年度から調査が開始され、今後数年計画を経て順次解明していく予定である。

調査の結果、今年度の発掘調査では、後述する3本の道路を骨格とする当地区における基本的な町割を把握することができたことが最大の成果であったと言える反面、町並立体復原地区より続くSS260の延長が、調査区東側の大規模な後世の改変により検出することができなかつたため、八地谷川以北でどのような線形を持つものか不明な部分が残った。

### 遺構 (第4図、PL. 1～6)

**SS5090** 八地谷川に沿って延長約40.0mにわたり検出された東西道路であり、全面砂利敷である。本道路の西端では標高50.71m、東端では48.83mを測ることから、東に向かって緩く傾斜していることが理解される。幅員については南側が八地谷川により削平を受けているため不明であるが、昨年度の調査により検出したSD5073との位置関係から、約3.0m前後を測るものと想定される。本道路の東端には、町並み立体復原地区より延びる南北道路SS260との交差点が存在するはずであるが、一乗谷川の氾濫により削平を受けており把握するには至らなかった。

町割の骨格

**SS2952** 延長約68.0mにわたり検出された南北道路であり、南端では先に述べたSS5090と、北端では次に述べるSS5092とそれぞれ直角に接続する。第52次発掘調査において検出された南北道路SS2952とは、現有の農道を挟んで対峙するため、本来は一本の道路であったことが確認された。道路の線形はSS5090との接続点から北へ24.0mの地点において西へ10度、51.0mの地点では東へ13度屈曲している。道路西側中ほどには区画2への正門であるSI5135が開いており、排水用の側溝SD5128は本地点より北へ向かって流れ出ている。道路幅員は、南側では後世の削平により不明であるものの、北側では2.0mを測り、もっとも広いSI5135前では2.8mを測る。路面は全面砂利敷である。道路縦断面を見ると、SI5135前の標高50.88mを最高地点とし、これより南北両方向ともに標高を減じている。南方向へは緩い勾配でありSS5090との接続地点で標高50.36m、北方向へはやや強い勾配を持ちSS5092との接続地点では標高49.36mを測る。

町割の骨格

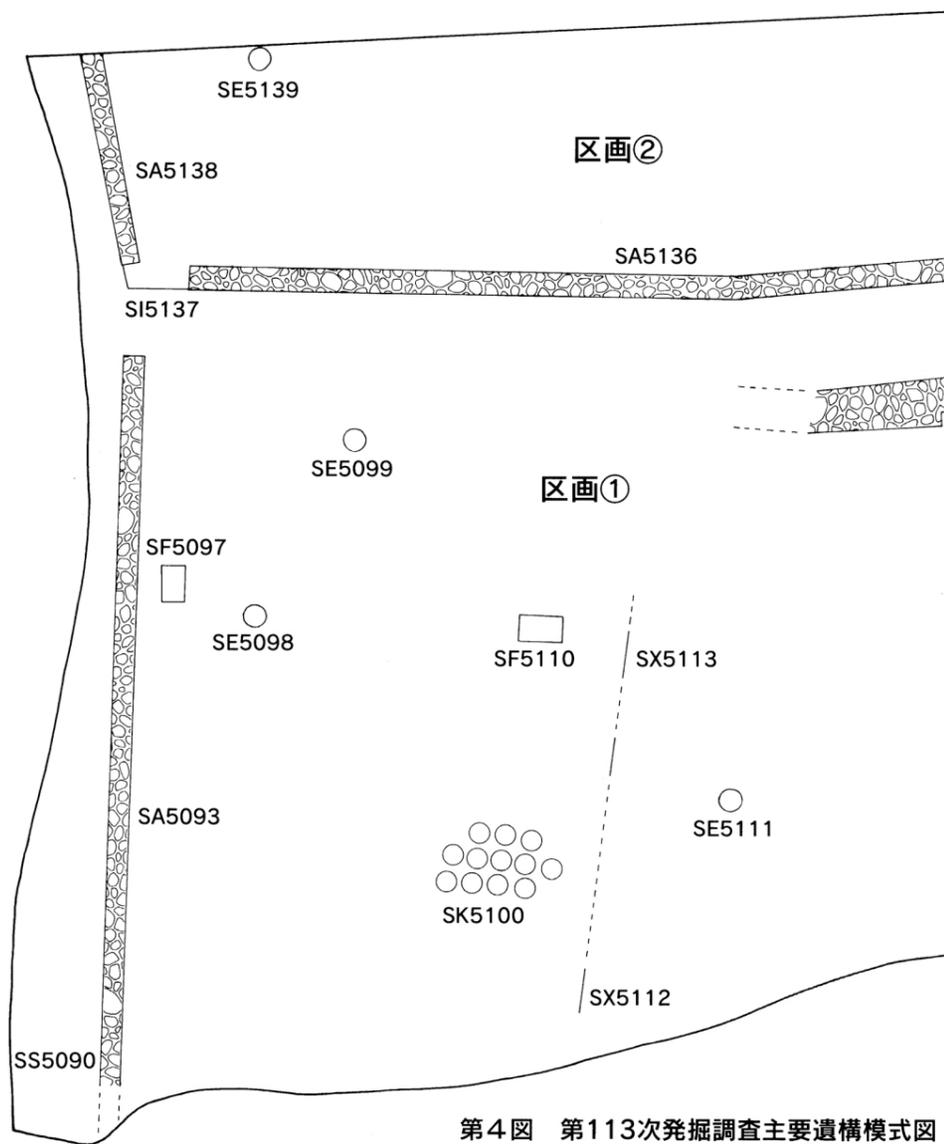
**SD5128** SS2952の西側側溝である。標高50.88mを最高点とするSI5135前を起点とし、北方へ流路をとり、延長34.3mを検出した。また、幅0.2～0.3mを測る。北端での標高は49.34mであり、比高差は1.54mである。

**町割の骨格** SS5091 延長約27.0mを検出し、西端では南北道路SS2952にT字路の形で接続する。八地谷へ入る現有の農道と重複しているため、調査面積に制約があり、幅員等の詳細については不明であるものの、南側には側溝SD5127を持つことが確認された。

SD5127 SS5091の南側側溝であり、幅0.6mを測る。現有道路の直下に位置することから、調査では一部分のみ延長5.2mの検出に留まった。

**区画①**

東西道路SS5090とSS5091、および南北道路SS2952に囲まれた広い区画を持つ。東側については後世に大きく削り取られていることから、東側の境界については特定することができなかった。現状で東西約27.0m、南北約60.0mを測る。本区画内への出入りについては、調査終了後におこなった補足調査により、SS5091に面する門を検出することができた。本区画内

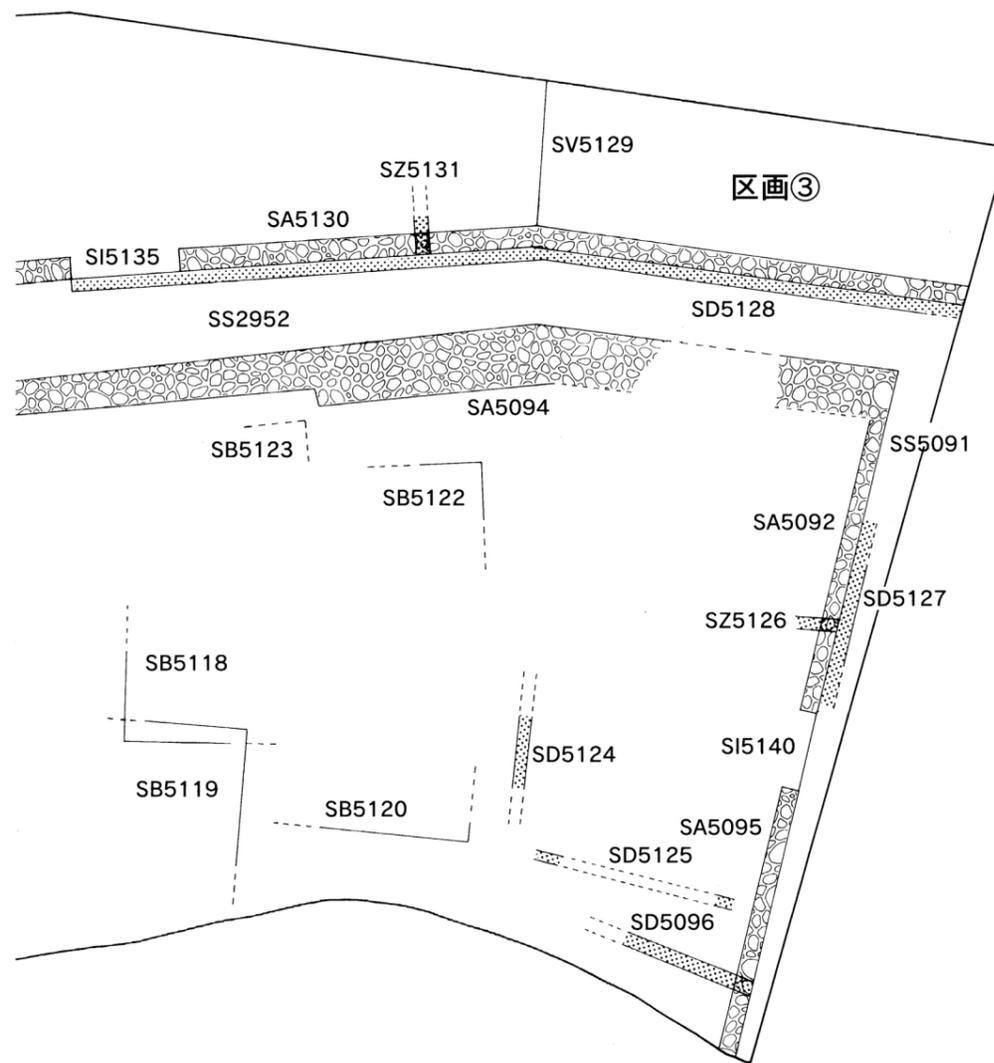


第4図 第113次発掘調査主要遺構模式図

においては井戸3、タメマス2、埋甕12、溝2、礎石建物4、土塁1、門1、石列1、柱穴を検出することができた。

本区画は、遺構の検出状況から南側の遺構群と北側の遺構群に分けることができる。南側の遺構群では井戸やタメマス、埋甕が検出されており、北側の遺構群では新旧2時期の礎石建物と、土塁を検出している。すなわち区画①の屋敷では、北側に住居空間を、南側には付属施設を配置していたものと考えられる。以上の遺構配置は、比較的新しい段階の区画に伴うものである。本区画では、この他に古い段階の区画割の痕跡を示すものと考えられる石列SX5112・5113を確認している。現段階での確定は避けたいが、本区画は元々幾つかの小区画に分かれていた可能性も想定できるものである。

SA5093 SS5090に面する東西方向の土塁石垣であり、延長約27.0mを検出した。



**SA5094** SS2952と区画①を分ける幅1.8～2.4mを測る南北方向の土塁石垣である。南側については後世に大規模な削平を受けているため検出することができなかつたものの、東西道路SS5090と接していたものと想定されることから、延長約65.0m前後を測るものと想定される。東面は区画①の方向を向いており、延長27.0mにわたり石垣を検出した。一部分の石垣が奥へへこむ特異な構造を持つ。このへこみ部分については、一見したところ石垣の新旧関係を示しているように見えるが、調査所見によれば、それを示す積極的な根拠は見当たらず、むしろ礎石建物SB5123との位置関係に要因を求めた方が穏当なように考えられる。西面はSS2952の方向を向いており、延長約41.0mを検出した。東面では直径0.5～0.8mを測る比較的小型の石材を用いているのに対して、西面では直径0.8～1.2mを測る大型の石材を用いている。

**SA5092** 区画①とSS5091を分ける東西方向の土塁石垣である。延長12.0mを測り、東端では区画①への出入り口にあたるSI5140と接する。直径0.5～1.6mを測る大小の石材を組み合わせて構築している。また、東側で後述する暗渠SZ5126が接続している。

**SA5095** SI5140を挟んで、SA5092と対になる土塁石垣である。東端が調査区域外のため規模は不明であるものの、延長約9.6mを検出した。中央付近で屋敷内からの溝であるSD5096が接続する。

**SI5140** 測量終了後の補足調査により新たに検出した門である。間口3.3mを測る。

**SD5096** SA5095に接続する延長4.5m、幅0.25から0.3mを測る南北方向の溝である。溝の周囲には石材が倒壊した状態で検出されたが、基底部の石列を原位置で検出することができた。溝底部には笏谷石製の板石を敷いていることが確認された。

**SB5118** 区画のほぼ中央で確認した建物である。今回の発掘調査により検出された礎石建物の中で最も遺存状態が良好であるが、全体的な規模や形状については不明である。東西3.5m、南北2.9mを確認した。

**SB5119** 一部がSB5118と重複する礎石建物であり、SB5118とは反対に東へ伸びる。

**SB5120** 調査区の東端で検出した礎石建物であるが、柱方向がSB5119と一致することから、あるいはこれと一体をなす建物であった可能性も考えられる。また、レベル的な所見からSB5118に先行する建物である。

**SB5121** SB5120の北側において検出されたものであり、SB5120に後出する建物である。

**SB5122** 本区画の西側端において検出された礎石建物である。

**SB5123** 礎石を1基のみ確認したのみである。SB5122と一体をなすものである可能性も考えられる。

**SD5125** 本区画北東端で検出された溝である。途中石列の欠失した部分が存在するが、延長8.0m、幅0.2mを測る。

**SZ5126** 屋敷内南から伸び、SA5092に接続し、SS5091の側溝であるSD5127に流れ出る暗渠である。延長1.9mを検出した。幅は0.2mを測る。

**SE5098** 屋敷内南側で検出された井戸であり、直径0.7m前後を測るが、湧水が激しく深さ1.7mで掘下げを断念した。

**SE5099** SE5098の西側で検出された井戸であり、東西道路SS2952の東側に位置する。湧水が

多く、深さ1.9mまでの掘下げをおこなった。直径は0.8mを測る。

**SE5111** 本区画の中で最も北側で検出された井戸である。直径0.9mを測り、深さ2.3mまで掘下げをおこなった。

**SF5097** 本区画の南端で検出された、東西方向に主軸を持つ方形石積遺構である。長軸1.1m、短軸0.65mを測り、基底部の1石のみ残存していた。

**SF5110** 南北方向に主軸を持つ方形石積遺構であり、長軸1.3m、短軸0.8mを測る。

**SK5100** 越前焼の大甕を埋設した甕ピットである。測量時には6基のみが検出されていたが、その後の精査により6基増え、合計12基が確認された。そのうちの1基には甕が埋設された状態であった。本遺構は焼土に覆われており、検出時の所見によれば下層遺構に伴うものと考えられる。



下層遺構

挿図1 SK5100近景(東から)

**SX5112** 本区画の東端において検出された石列であり、2石分の延長1.6mのみを確認したにすぎない。



下層の町割

挿図2 SX5112近景(北から)

**SX5113** SX5112の西7.5m付近より、延長7.1mにわたって検出した石列であるが、多くが倒壊した状態であり、原位置を保っているものは4石のみであった。検出時の所見および方角などから、もともとはSX5112と同一の石列であった可能性が高いものである。

## 区画②

東は南北道路SS2952、南は東西道路SS5090、北は区画③に囲まれた区画であり、区画の大部分は調査区域外西側に広がるものと考えられる。本区画内においては井戸1、暗渠1、土塁3、石垣1、門2、石列3、柱穴を検出することができた。

**SV5129** 南北道路SS2952に直行する石垣であり、区画②と③を分ける石垣である。延長4.6mを検出したが、調査区外へ伸びている。区画②と③との比高差は約0.6mである。

**SA5130** 南北道路SS2952と区画②の屋敷を区切る土塁石垣である。南端ではSI5135と北端ではSV5129とそれぞれ接続し、延長12.9mを測る。また、中央やや北よりには屋敷内からの排水施設である、暗渠SZ5131を有する。

**SA5136** SA5130とはSI5131を挟んで対になる土塁石垣である。延長28.9m、幅1.0m前後を測り、南端ではSI5137と接続している。

**SA5138** 区画②の南側土塁であり、東西道路SS5090と区画②を区切る土塁である。西端が調査区域外へ伸びていることから延長については不明である。東端ではSI5137と接続している。

**SE5139** 調査区域西端において検出された井戸であり、直径0.9mを測る。安全のため完掘はおこなっていないが、掘削深度は3.2mである。本井戸の埋土は焼土を主としたものであった。

**SI5135** 間口5.4mを測り、2段の階段状の形態を呈している。南側にはSA5136が、北側にはSA5130がそれぞれ接続する。

**SI5137** 区画②の南コーナー部分に位置する門であり、間口1.6mを測る。2段の階段状の形態を呈する。

**SZ5131** SA5130を貫通する、屋敷内よりSD5128への排水施設であるが、土塁内側において接続する溝等を確認することはできなかった。

### 区画③

東は南北道路SS2952、南は区画②に挟まれる区画であるが、区画の大部分が調査区域外に延びているうえに、後世の削平により遺構面が大きく削られていたことから、遺構を確認することはできなかった。

(水村伸行)

## 遺物(第5～8図、PL. 7～10)

今回の発掘調査により得られた遺物は総数11,562点であり、その内訳は次ページの表2に示すとおりである。以下に、出土層位および遺構ごとに紹介する。

### 表土層

本層出土品は旧水田耕作土除去中に出土した遺物である。

**越前焼** 1～3は大型甕の口縁部片である。3は口唇部が厚く肥厚するものであり、本遺跡では最も一般的なタイプである。これに対し1および2は口唇部を上方へつまみ上げるタイプであり、3より古相を示すものである。4～6は播鉢である。4は口径24.0cmを測るが、器高は不明である。12条を1単位とする播目を全面に有する。5は口径18.4cm、器高7.8cmを測る。11条を1単位とする播目を等間隔で有する。6は口径16.8cmを測るが、器高は不明である。10条を1単位とする播目を全面に有し、一部には横方向にも施している。7は口径21.0cmを測る鉢である。8は口径12.5cmを測る壺であり、口唇部から体部外面にかけて濃緑色を呈する自然釉が付着する。9は口径5.4cmを測る小型の壺である。体部下半は縦方向のヘラ削り調整をおこなっていたものと考えられ、残存部末端にヘラの痕跡を僅かに確認することができる。また、内面に炭化状を呈した内容物が認められる。10は口径5.8cmを測る小型壺である。

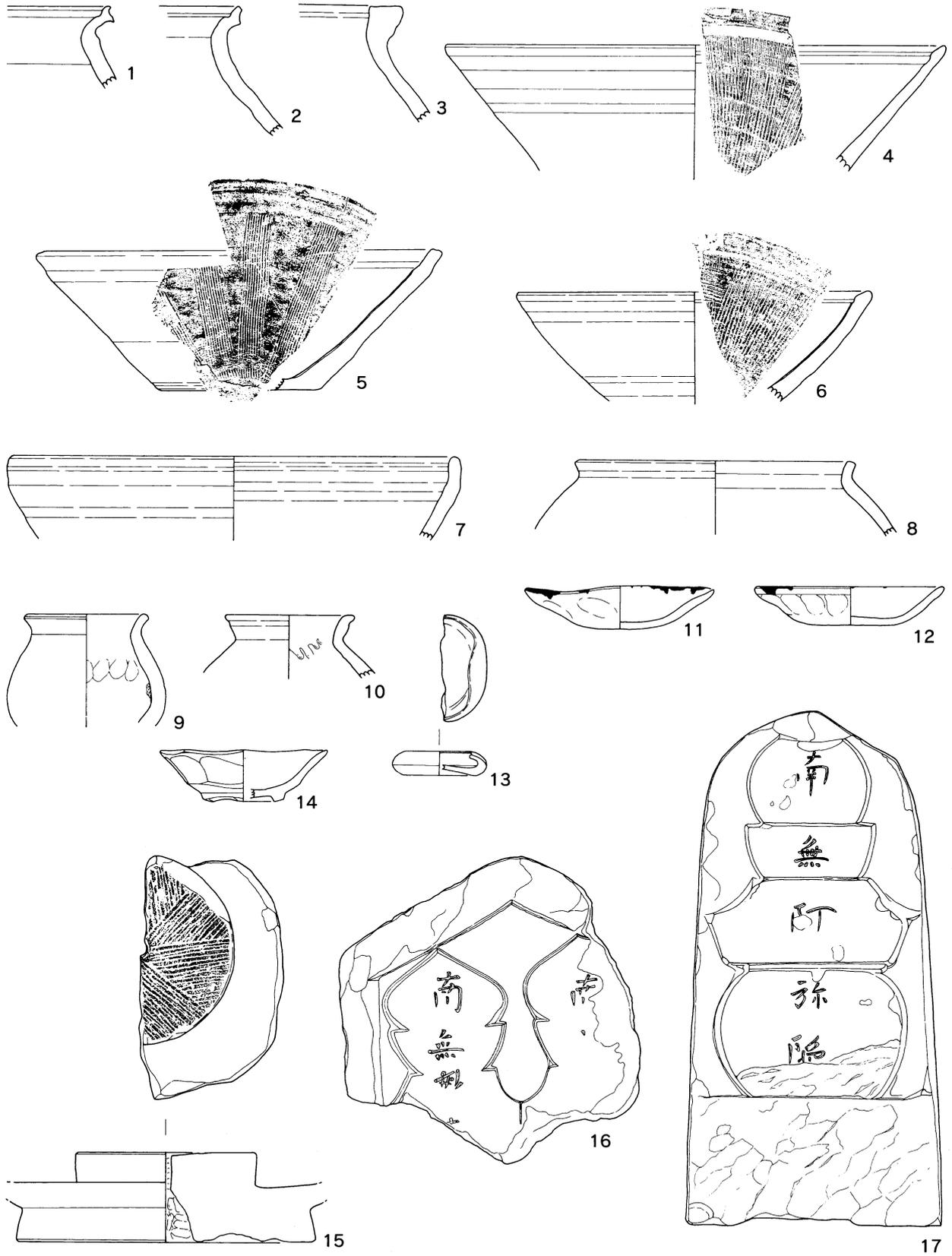
**土師質皿** 11は口径9.1cmを測り、本遺跡における分類のC類に該当する。口唇部内外面にタール状の煤が付着していることから、灯明皿として使用されていたものであることがわかる。12は口径9.2cmを測り、本遺跡における分類のC類に分類されるものである。体部外面には明瞭な指頭圧痕が認められる。13は耳皿である。

大別	細別	器種	点数	%
日本製	越前焼	甕	3,054	
		壺	740	
		鉢	202	
		搦鉢	754	
		水指	9	
		花器	5	
		桶	17	
		卸皿	3	
	小計	4,784	41.38	
	土師質	皿	4,094	
		土釜	11	
		土鈴	1	
		土錘	1	
		壺	3	
	小計	4,110	35.55	
	鉄釉	碗	66	
		皿	2	
		壺	49	
		鉢	2	
		香炉	5	
		水指	2	
		瓶	3	
		天目台	1	
	小計	130	1.12	
	灰釉	碗	8	
		皿	43	
		壺	2	
		卸皿	3	
		鉢	15	
		香炉	5	
		瓶	2	
		水指	1	
袋物		1		
小計		80	0.69	
瓦質	風炉	8		
	香炉	5		
	壺	1		
	瓦燈	5		
	火舎	8		
	仏花瓶	1		
不明	4			
小計	32	0.28		
珠洲焼		2	0.02	
信楽焼		22	0.19	
その他		4	0.03	
土師器		50	0.43	
須恵器		139	1.20	
日本製合計		9,353	80.89	

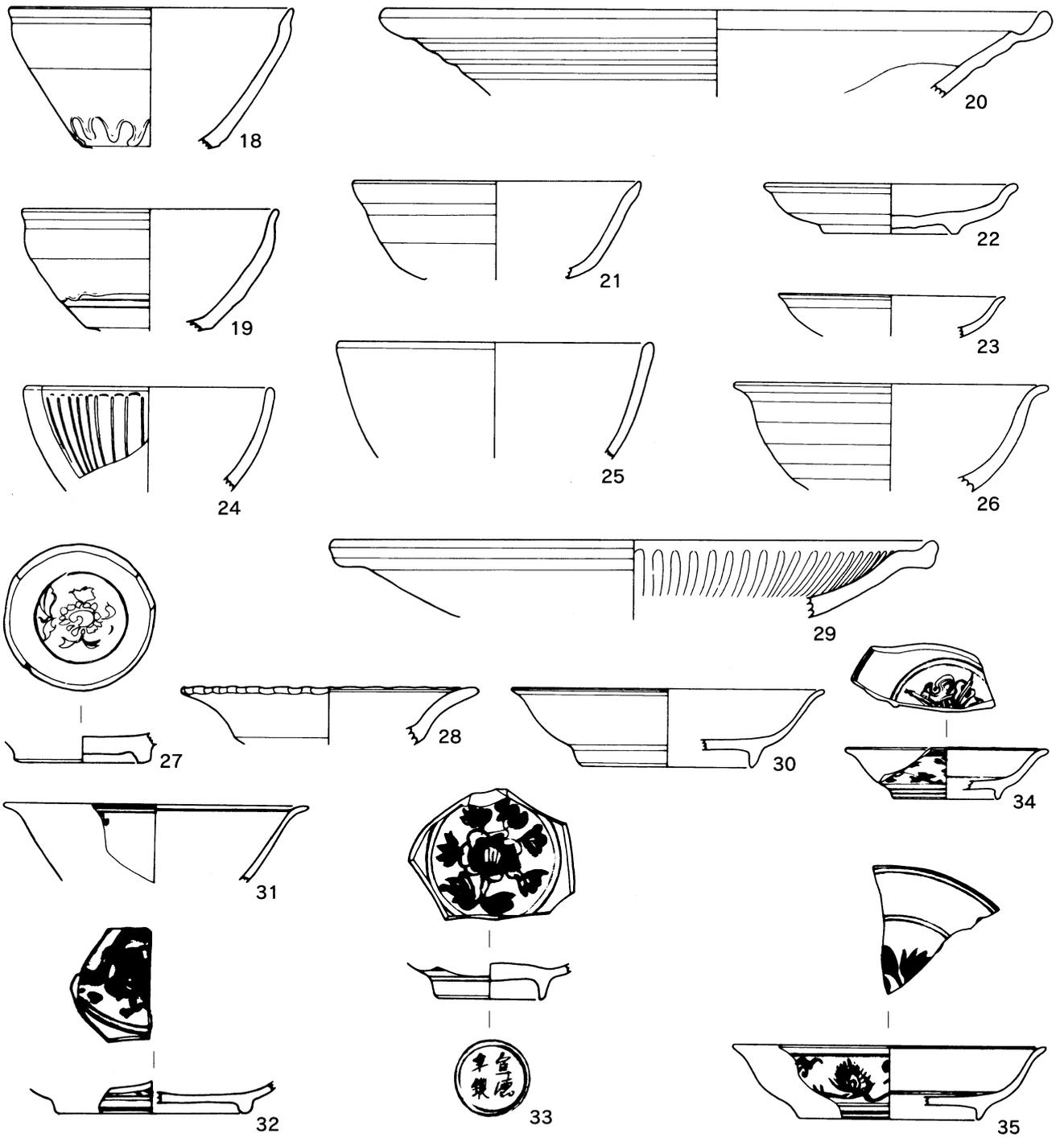
大別	細別	器種	点数	%
中国製	青磁	碗	127	
		皿	195	
		香炉	16	
		鉢	11	
		盤	3	
		壺	3	
		花生け	2	
		水注	1	
	小計	358	3.10	
	白磁	碗	9	
		皿	491	
		坏	57	
		瓶	2	
		香炉	7	
		不明	1	
		小計	567	4.90
	染付	碗	54	
		皿	291	
		鉢	4	
		坏	12	
		壺	1	
		瓶	1	
	小計	363	3.14	
緑釉	壺	2	0.02	
褐釉	壺	2	0.02	
瑠璃釉	碗	1	0.01	
黒釉	壺	2	0.02	
その他	壺	2	0.02	
中国製合計		1,297	11.22	
朝鮮製	碗	6		
	皿	6		
	壺	14		
	瓶	3		
朝鮮製合計		29	0.25	
多量土器	壺	4	0.03	
		125	1.08	
輸入陶磁器合計		1,455	12.58	

細別	器種	点数	%	
金属製品	銅銭	3		
	釘	61		
	かすかいかい	2		
	小柄の柄	1		
	刀子	1		
	不明	4		
	合計	72	0.62	
	石製品	バンドコ	142	
		硯	14	
		砥石	6	
盤		43		
火鉢		44		
鉢		22		
石仏・石塔		12		
火炉		5		
碁石		6		
臼		21		
井戸杵		11		
板石		2		
炉壇石		1		
鉢		1		
風炉		2		
その他		34		
不明		5		
合計	371	3.21		
木製品	杓	1		
	曲物	1		
	漆椀	4		
	漆皿	1		
	下駄	14		
	桶側坂	5		
	桶底板	3		
	折敷	12		
	屋根材	5		
	碇	1		
	柱	2		
	箸	2		
	ヘラ	1		
その他	251			
合計	303	2.62		
その他	壁土	3		
	種子	1		
	不明	4		
合計	8	0.07		
総合計		11,562		

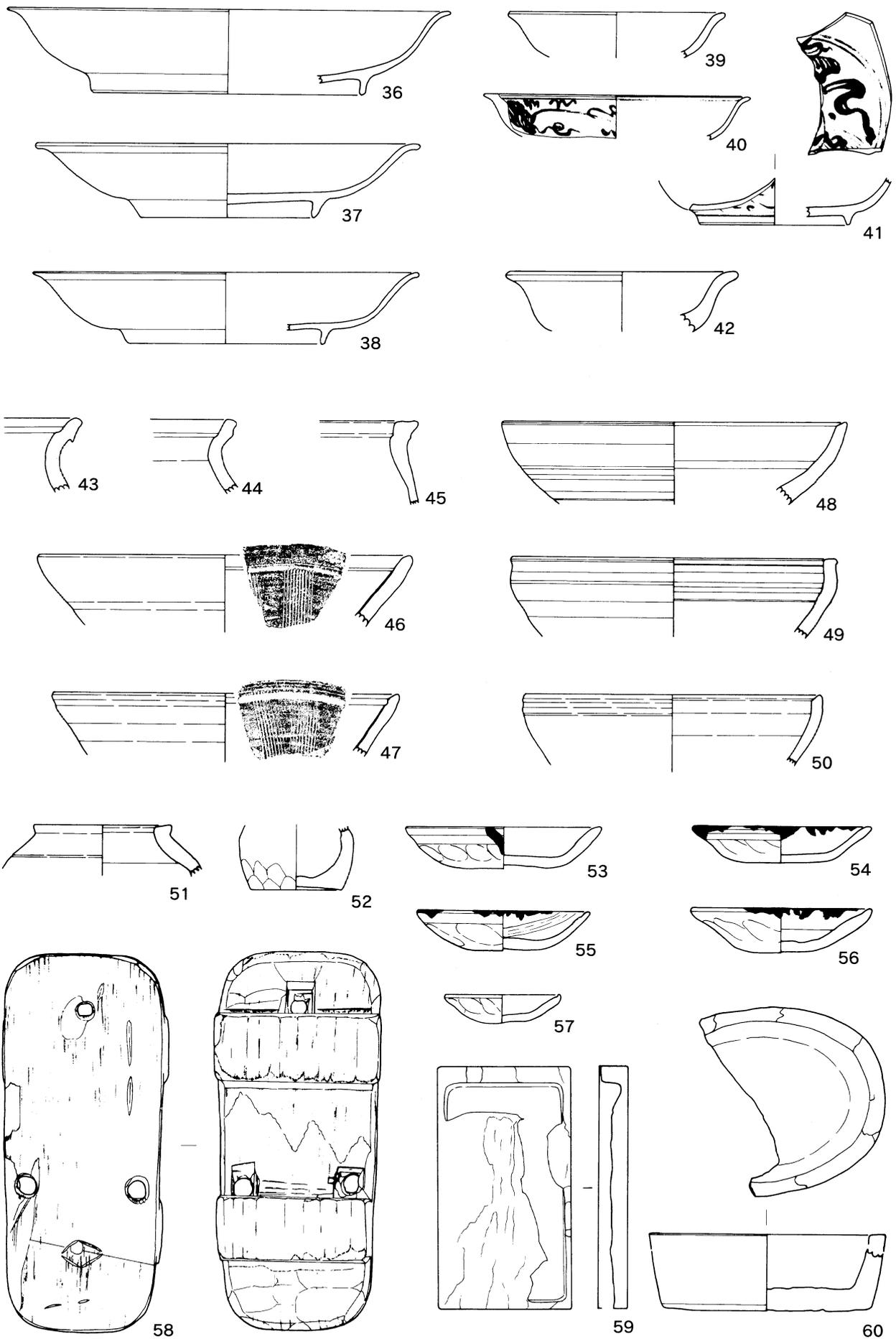
表2 第113次発掘調査出土遺物一覧



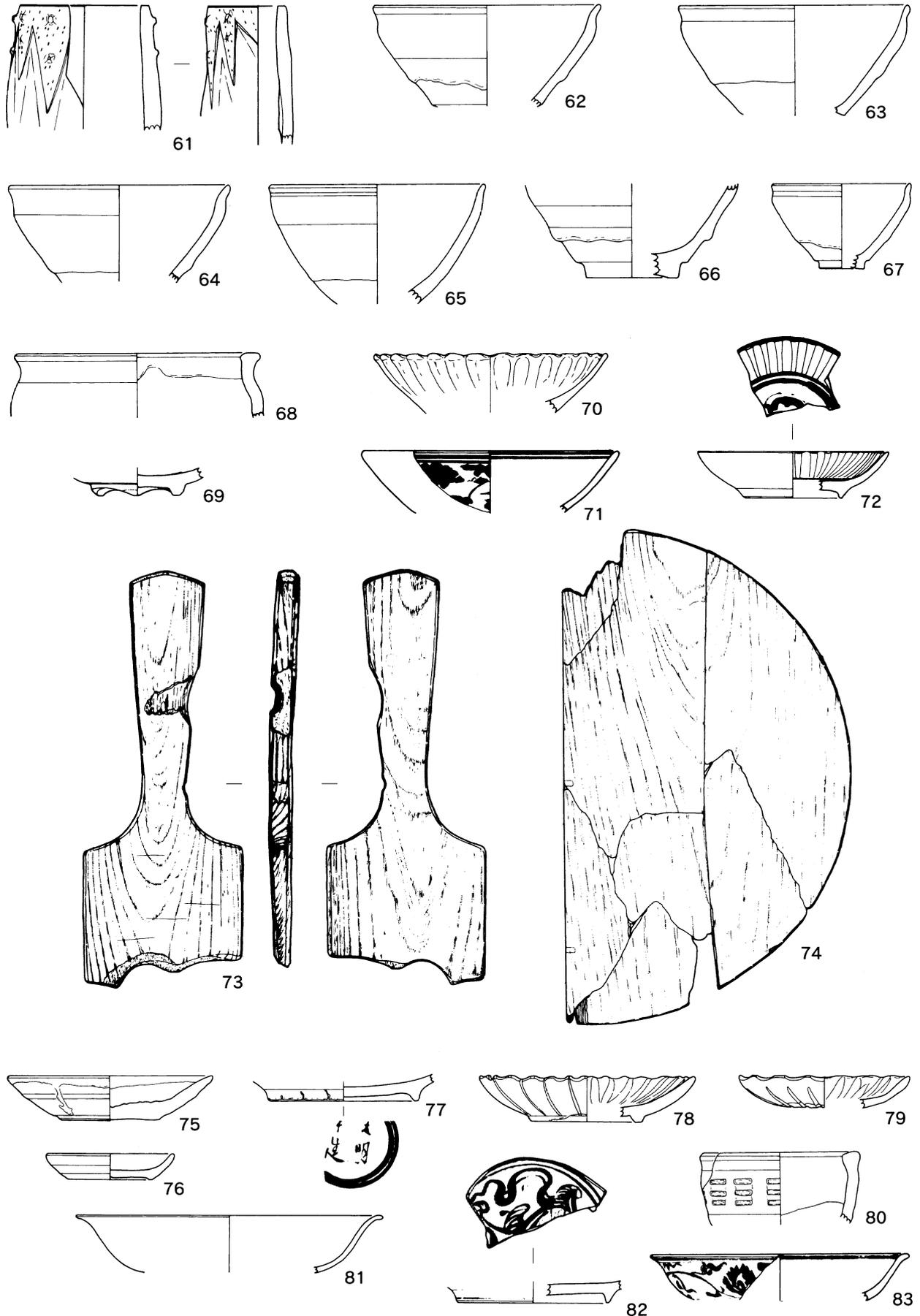
第5図 第113次調査出土遺物(1) (1~10、15~17はS=1/4、他はS=1/3)



第6図 第113次調査出土遺物(2) (S=1/3)



第7図 第113次調査出土遺物(3) (43~52、60はS=1/4、他はS=1/3)



第8図 第113次調査出土遺物(4) (S=1/3)

**中国製陶磁器** 14は口径7.9cm、器高2.5cmを測る白磁小坏であり、底部には袂り高台を有する。釉調がやや黄色味を帯び、胎土に鉄分を多く含んだ華南系の白磁である。

**笏谷石** 15は石白の皿であり、受部の一部を欠失しているため法量は不明である。16は石塔婆であるが下半を欠失している。碑面には2基の五輪等をレリーフ状に彫刻し、「南無妙…」の銘を有する。17は器高24.5cmを測る石塔婆である。五輪塔をレリーフ状に彫刻し「南無阿弥陀仏」の銘を有する。

#### 遺構確認面

本層出土品は表土除去後におこなった、遺構確認作業中において出土したものである。

**瀬戸美濃製品** 18は口径12.0cmを測る天目茶碗である。胎土は暗黄褐色を呈し、釉調は暗い飴色に近い。体部内面には使用痕跡と考えられる微細な傷が多く認められる。19は口径10.8cmを測る天目茶碗である。胎土は暗黄褐色を呈し、釉調は黒色をベースとするが一部は暗い飴色を呈している。また体部下半には錆釉が認められる。20は口径28.1cmを測る灰釉鉢である。焼成は甘く釉の発色も不良である。21は12.3cmを測る灰釉碗である。体部外面下半を露胎とするほかは施釉している。釉調は暗黄緑を呈し、焼成は良好である。22は口径10.4cm、器高2.2cmを測る灰釉皿である。内外面全面を施釉し、焼成は良好である。23は口径9.8cmを測る灰釉皿である。

**中国製陶磁器** 24は口径10.3cmを測る青磁碗であり、体部外面には弱い線描蓮弁文を有する。胎土は灰色を呈し、焼成は良好である。25は口径13.3cmを測る青磁無文碗であり、内外面ともに貫入が多く認められる。26は口径13.4cmを測る青磁碗であるが、口縁端部を大きく外反させるタイプであるところが、通有のタイプと異なる点である。27は底径5.8cmを測る青磁碗の底部片である。内面には印花文を有し、釉調は暗い緑色を呈している。28は口径12.6cmを測る青磁皿であり、内湾気味に立ち上がった体部を腰部で大きく外湾させている。口唇部は波状を呈する。器面全体に貫入が認められる。29は口径25.4cmを測る青磁盤である。二次的な火を受けたものと考えられ、釉に若干の火脹れが認められ、釉調もやや白っぽく変色している。30は口径13.4cm、器高3.4cmを測る口縁端反りタイプの白磁皿である。31は口径13.0cmを測る染付碗である。口縁部は大きく外反し、体部には唐草文を描くB群である。32は底径8.0cmを測る染付皿であり、底部内面に玉取獅子を描くB1群である。33は底径4.4cmを測る底部片であり、断面が凸状を呈するいわゆる饅頭心タイプのE群のものである。内面には草花文、外面には「宣徳年製」の銘を有する。34は口径8.8cm、器高2.2cmを測る皿であり、口縁端部を外反させるB群である。体部外面には牡丹唐草文、底部内面には十字花文を描く。また、内外面ともに貫入が多く認められる。35は口径13.6cm、器高3.1cmを測る皿であり、口縁部を外反させるB群である。体部外面には牡丹唐草文、底部内面には花を描いている。内外面ともに貫入が多く認められ、また、釉に若干の火脹れが認められることから、二次的な火を受けたものと考えられる。

#### SK5100

本遺物は遺構の項で述べたとおり、越前焼大甕の抜き取り穴より出土したものである。

**中国製陶磁器** 36は口径22.4cm、器高4.3cmを測る端反りタイプの白磁皿である。釉は僅かに灰色を呈するものであり、焼成は良好である。37は口径19.6cm、器高3.8cmを測る白磁皿である。釉調は36のものと同じであるが、器面に貫入が認められる。38は口径19.4cm、器高3.7cmを測る端反りタイプの白磁皿であり、釉調は薄灰色を呈している。また外面には全体的に黒っぽい斑点が認められる。39は11.0cmを測る端反りタイプの白磁皿である。釉調は濁った灰色を呈しており、釉厚も厚く全体的にぼつてりとし貫入が多く入る。36から38の白磁と比べ明らかに生産地の異なるものである。40は口径13.4cmを測る染付皿であり、体部外面に牡丹唐草文を描くB群のものである。41は底径7.5cmを測る染付皿B群であり、底部内面に玉取獅子を、体部外面には牡丹唐草文を描いている。

#### SS5090

道路面直上より出土した遺物である。

**中国製陶磁器** 42は口径11.7cmを測る青磁皿であり、釉は厚く、胎土は硬質の灰色を呈している。典型的な龍泉窯の製品である。

#### SD5073

本遺構は、昨年度の調査区である第112次発掘調査区内北端に位置し、現八地谷川の南側に平行する流路を持っていた旧八地谷川である。調査区としては、本年度の対象地域外ではあるものの、今年度の調査中に採取した遺物であるため報告するものである。

**越前焼** 43は口縁部に段を残すII群のものであり、44は口縁帯が消失し、弱い凸状を呈するIII群のもの、45は口縁部が厚く肥厚し、本遺跡ではもっとも通有の形態であるIV群のものである。46は口径18.8cmを測る播鉢であり、内面には10条を1単位の播目を有する。色調は橙褐色を呈しており、焼成はやや不良である。47は口径17.5cmを測る播鉢であり、内面には9条を1単位とする播目を有する。砂粒を多量に含むが、色調は灰褐色を呈し焼成は良好である。48は17.2cmを測る鉢である。体部内面下半は使用痕が明瞭であり、磨耗している。49は16.3cmを測る鉢である。50は口径14.8cmを測る鉢であり、内面には内容物の痕跡である黒色を呈する物質が付着している。51は口径7.0cmを測る小型甕である。52は底径4.6cmを測る小型壺であり、体部下半には整形の際の指頭圧痕が認められる。また、内面には鉄分が付着していることから、本品がお歯黒壺として使用されていたものと想定することができる。

**土師質皿** 53は口径9.8cm、器高2.1cmを測り、橙褐色を呈する。54は口径9.0cm、器高1.9cmを測る。口縁部にタールが付着していることから、灯明皿として使用されていたものと考えられる。55は口径8.8cm、器高2.0cmを測る。口縁部にはタールが結晶状になって付着している。56は口径9.2cm、器高2.2cmを測る。体部内面上半から口縁部にかけてタールが多く付着している。57は口径5.8cm、器高1.4cmを測る。胎土中に砂粒を多く含む点において、他のものと異なる。53から57ともにC類に分類される。

**木製品** 58は全長19.2cm、幅8.0cmを測る下駄である。

**石製品** 59は全長12.3cm、幅6.8cmを測る方形を呈する硯である。60は全長12.0cm、幅9.6cmを測る楕円形を呈する鉢である。石材は本遺跡で主体的に使用される凝灰岩質の笏谷

一括遺物

石である。

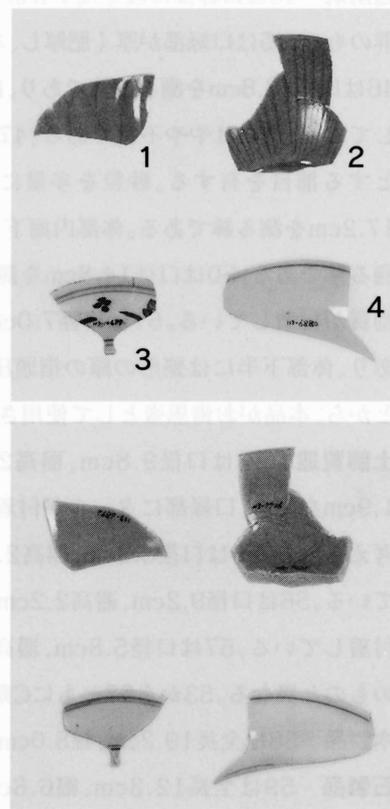
SE5139

井戸を埋める埋土からの出土である。埋土は主に焼土で構成されており、火事場整理に伴うものであると想定されることから、本井戸出土遺物は一括性の高い遺物群である。

**越前焼** 61は筒形を呈するものであり、上面から見た平面形態は片面が直線的になった半円形である。用途としては、その形態から掛花生として用いられていたものと考えられる。上部にはヘラにより連続した山形の区画が作られ、区画外には粘土粒貼付けによる凸文とヘラによる刺突文を有する。焼成は極めて良好であり、降灰による釉が認められる。

**瀬戸美濃焼** 62は口径11.1cmを測る天目茶碗である。胎土は緻密であり、釉調は黒褐色を呈する。焼成は良好。63は口径11.3cmを測る天目茶碗である。胎土は橙褐色を呈し、焼成はやや軟質である。釉調は黒褐色を呈するが、全体的に火脹れが認められることから、二次的な火を受けたものと考えられる。64は口径10.8cmを測る天目茶碗である。胎土は薄灰褐色を呈し、焼成は良好である。釉調は暗茶褐色を呈するが、釉下端に厚い溜りが見られることから、粘性のある釉を用いていたものと考えられる。65は口径10.4cmを測る天目茶碗である。62～64の物に比して体部が強く立ち上がるという、形態的に若干古い様相を呈する。釉は黒褐色を呈するが、全体的に火脹れが見られることから二次的な火を受けたものと考えられる。66は天目茶碗の底部片である。灰色を呈した緻密な胎土を用いており、釉は黒褐色の粘性の強いものを厚く塗っている。底部断面では釉厚は1～3mmを測る。67は口径6.8cm、器高4.2cmを測る小型の天目茶碗である。胎土および釉調ともに66に類似する。68は口径12.1cmを測る鉄釉壺である。焼成は良好で胎土は須恵質を呈している。釉厚は薄い。

**中国製陶磁器** 69は抉り高台の白磁皿底部である。底部内面には重ね焼きに際して生じた高台痕が4ヶ所認められる。胎土は緻密であるものの橙色を呈した、やや軟質のものであり、釉は濁った白色を呈し、黒色粒及び貫入を多く含む。華南系の白磁である。70は口径11.6cmを測る白磁皿である。口唇部が波状を呈する菊皿と呼ばれるものであり、胎土、釉ともに良好である。挿図3-1、2は青磁碗である。1は体部外面に鎬蓮弁文を有し、2は線描蓮弁文を有する。1のタイプは本遺跡では古相に属するものである。71は口径12.6cm、器高2.3cmを測る染付碗であり、体部外面には唐草文を描くC群のものである。72は口径9.4cmを測る染付皿であるが、体部内面に鎬文を有する。挿図3-3、4は染付皿であり、E群に分類される。



挿図3 SE5139出土遺物

**木製品** 73は残存長21.0cm、幅7.9cmを測り、手桶の一部である可能性を想定することができる。74は直径24.8cm前後を測る曲物の底部であり、一部に底板接合にともなう柵穴が認められる。

#### **G26グリッド付近焼土層**

本遺物は、先に述べたSX5100の西に位置するG26グリッド付近においてまとまって検出された焼土層内より出土した遺物群であり、単一の時間内のまとまりを持つものである。本焼土層とSX5100を埋める焼土層は同一のものであると考えられる。

**瀬戸美濃焼** 75は口径10.1cm、器高2.2cmを測る灰釉卸皿である。胎土中には気泡を多く含むが、焼き締りは良好である。76は口径6.2cm、器高1.3cmを測る灰釉小皿である。底部外面を露胎とするほかは、全面に灰釉を施す。

**中国製陶磁器** 77は底径7.2cmを測る青磁皿である。底部外面には「大明年造」銘を有する。78は口径10.6cm、器高2.3cmを測る青磁皿である。口唇部は波状を呈し、体部内外面ともに鎬文を有する。胎土は薄灰色を呈し、硬質であるが、釉調はやや薄緑色を呈する。79は口径8.4cmを測る青磁皿であり、口唇部は波状を呈し、体部内外面ともに鎬文を有する。胎土はやや軟質であるが、釉は良好である。また、貫入を多く含む。80は口径7.9cmを測る青磁算木文香炉である。胎土および釉ともに良好であるが、二次的な火を受けたために釉全体に細かな火脹れが認められる。81は口径15.2cmを測る白磁皿であり、本遺跡では通有に認められる端反りタイプのものである。82は底径7.4cmを測る染付皿B1群の底部片であり、内面には玉取獅子を描いている。83は口径12.8cmを測る染付皿B1群の体部片であり、外面には牡丹唐草文を有する。全体的に細かな火脹れが見られることから、二次的な火を受けたものと考えられる。

(水村伸行)

### 3. 環境整備

#### 第102次発掘調査地斉藤整備工事

平成14年度は一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査・環境整備事業の「中期10箇年計画」に基づき、平成10年度の第102次発掘調査地(斉藤地係)2,350㎡について、平成14年9月3日～10月20日にかけて整備工事を実施した。なお整備状況の写真撮影は、11月20日に行った。

第102次発掘調査では、幹線道路の両側に武家屋敷跡が検出されたが、内部の建物跡や溝跡の残りは良くなかった。なおこの地区は、発掘遺構展示地区に入っている。

遺構検出面にはすでに遺構保護のために、朝倉氏遺跡資料館によって山砂が5cm前後で敷かれていたが、はじめに除草剤(バスター)を撒いて一週間ほどしてから、発掘排土で埋め戻しを行った。埋め戻しの厚さは、道路東側の屋敷では10～80cm、西側の屋敷では5～20cmである。発掘調査で掘られていた溝は、排水を考えると内部に発掘で出土した小さめの石をいれ、その上に砂利を被せて埋め戻した。

礎石が残っていた建物跡SB4787は、7cm厚の碎石基礎に6cm厚でレミファルトを舗装した。建物の平面規模は4.2×3.2mの大きさを復原し、境界にはレミファルトに合わせて黒色のアスファルトブロック(240×120×25mm)を用いた。建物跡SB4767は柱を据える礎石は残っていなかったが、東・南・北の3方向に建物に付属する石列が遺存していたので、その真上に茶色のアスファルトブロックで縁取り、内部は9cm厚の碎石基礎に6～7cm厚でソイルセメントを舗装し表示した。建物の南北長は7.6mであるが、東西長は西側が土塁下に埋まっているので不明である。SX4754辺りの遺存状況は悪いが建物跡と推定される所には、アスファルトブロックで縁取りしないで、礎石や通路、溝からおおよその範囲(15.6×8.6m)を割り出し、11cm厚で山土を舗装した。

建物跡の周辺は砂利混じりの9～10cm厚の山土舗装とし、通路跡には小砂利を化粧敷した。また花崗岩の砂が敷かれていた平庭跡は、珪石を敷いて表示した。

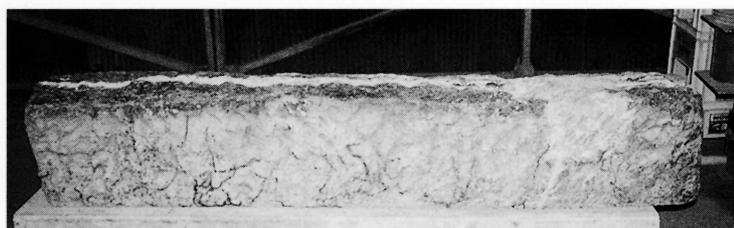
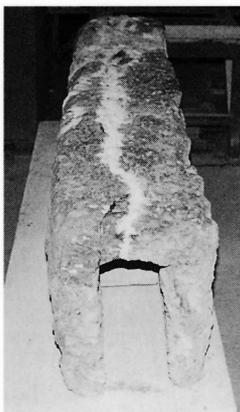
溝は側石を補修するとともに、側石の無いところには出土した自然石を補充し整備した。底にはソイルセメントを5cm厚で充填した。遺構でない排水路は、遺構の石と間違われないう、側石に擬石(粗面型ぎふミカゲ・42×35×28cm)を使用した。なお北側の側石は、土塁の裾の石と推定される石列に出土した自然石を積み上げている。擬石の南側法面は、高麗芝の筋張りとした。

井戸、石積施設は、側石の無い所には出土した自然石を補充、修復した。内部は大部分を埋め戻し、上面に5～7cm厚でソイルセメントを舗装した。

土塁の裾の石垣は、倒石は戻し、足りないところには発掘で出土した自然石を補充して修復した。なお石垣の石は、朝倉氏時代から後世埋められるまで表に出ていた部分は色が濃く風化の度が強く、土に埋もれていた部分は生地のみままで白っぽいので、道路に面していた向きが分

かるのである。また上方には盛土して、高麗芝のべた張とした。因みに中世の日記類には芝築地や築地に芝を伏せるなどの記載がみられ、築地や土塁に芝を使用していたことが推察される。土塁の幅は、道路の西側の土塁は2.7m、東側の土塁は4mと5.7mで復原した。

西側の屋敷の入口の踏み石に、2個の笏谷石製の石樋を転用している。北側のものが傷みがひどかったので補修し据えなおした。石が欠けて無いところにはタイルセメントエポキシ系EPS20を充填、割れたところはエポキシ系ボンドE2085で接着修理した。また内部には見学者の踏圧に耐えられるよう、薄いビニールシートを張り径12mmの鉄筋を3本入れモルタルを充填した。なお石樋の寸法は、長さが185cm、



幅が28cm、高さが34cmで、溝幅は12cm、溝の高さは27cmである。

挿図4 踏石石樋補修状況

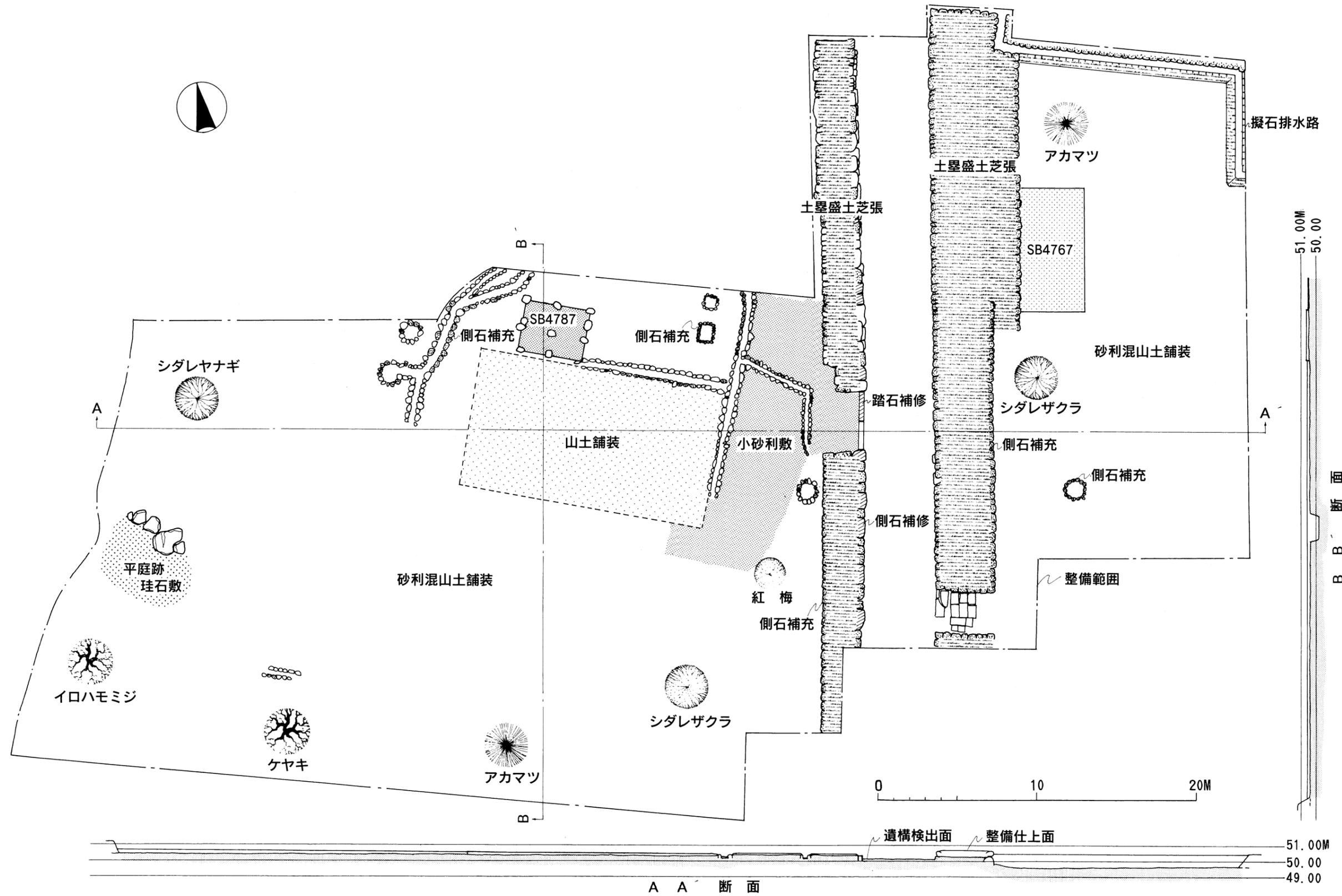
建物跡や土塁跡、平庭跡、井戸跡、石積施設跡の計9箇所に、遺構表示石を設置した。なお6個は、追加工事で据えたものである。表示石は花崗岩製で、大きさは35×30×20cmである。前面と側面はこぶだし仕上げとし、上面を本磨きし文字を陰刻した。

高木植栽は、四季の観賞を考慮し、また戦国時代に好まれた樹種や当時一乗谷に生育していたと推定される樹木の中から選んで実施した。植栽に当たっては、建物跡や井戸跡、石積施設、溝などの遺構が存在するところや施設間の歩行ルートを除いて、往時一般的に植栽された塀際や屋敷の隅の方に配植した。なお建物SB4767の上に既存したシダレザクラは、南側の方に移植した。

(藤原武二)

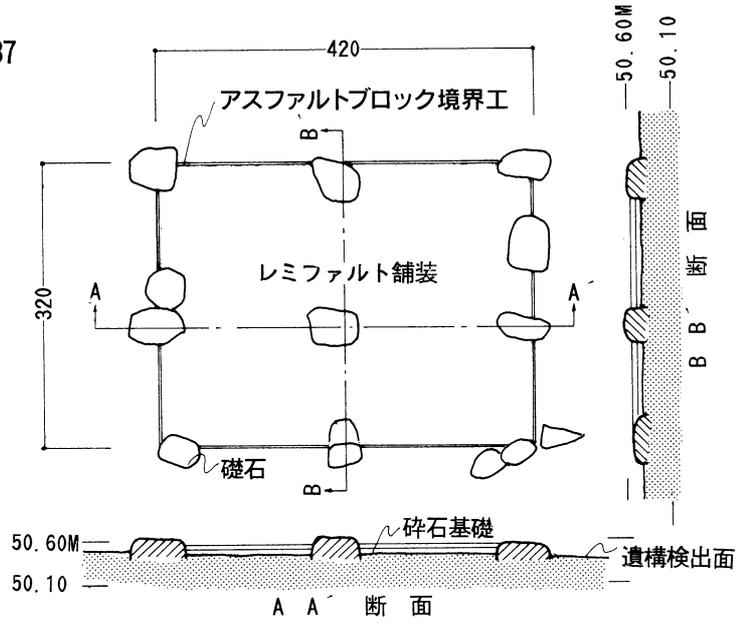
樹種	樹高 (m)	幹周 (m)	枝張 (m)
アカマツ	4.5	0.27	3.7
〃	5.0	0.30	2.9
シダレザクラ	3.4	0.16	1.7
イロハモミジ	4.0	0.23	1.8
紅梅	3.0	0.24	1.2
ケヤキ	3.7	0.16	1.25
シダレヤナギ	4.0	0.15	2.0

表3 植栽樹木一覧

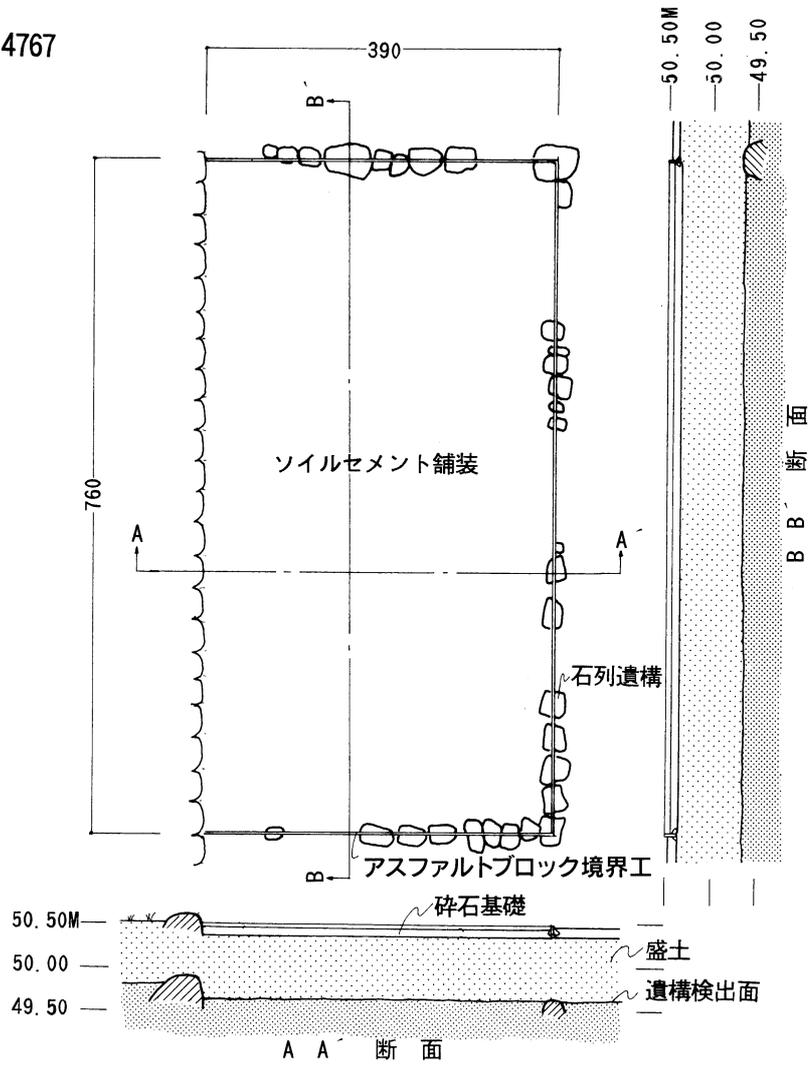


第9図 第102次発掘調査地高藤整備全体図

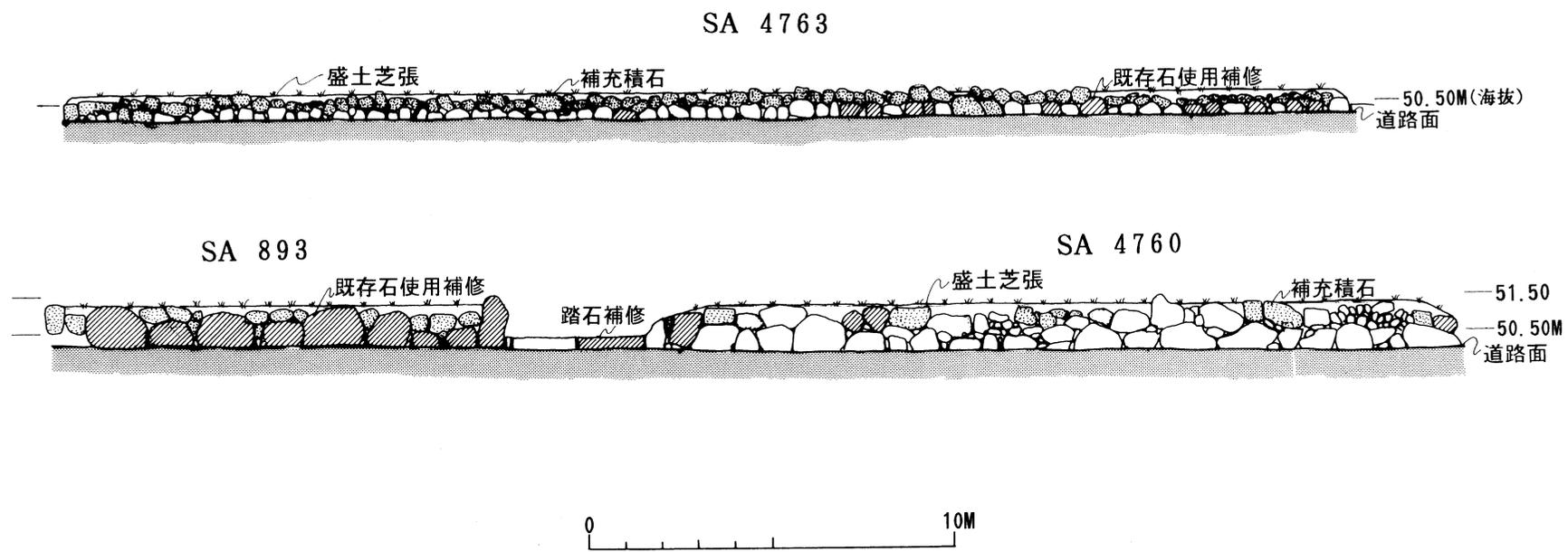
S B 4787



S B 4767



第10図 建物跡整備図



第11図 土壘石垣補修立面図



調査区南半(東から)



調査区北半(東から)



SS2952全景(北から)



SS2952全景(南から)



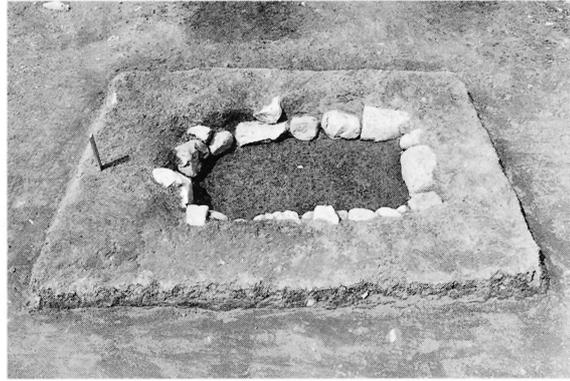
SS5090全景(西から)



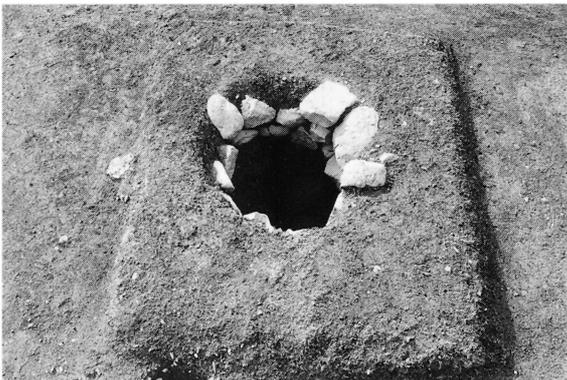
SS5091・SD5127全景(西から)



SF5097近景(北から)



SF5110近景(東から)



SE5098(東から)



SE5111近景(東から)



SB5118近景(西から)



SI5140近景(北から)



SD5096近景(北から)



SD5124近景(西から)



SA5138近景(南から)



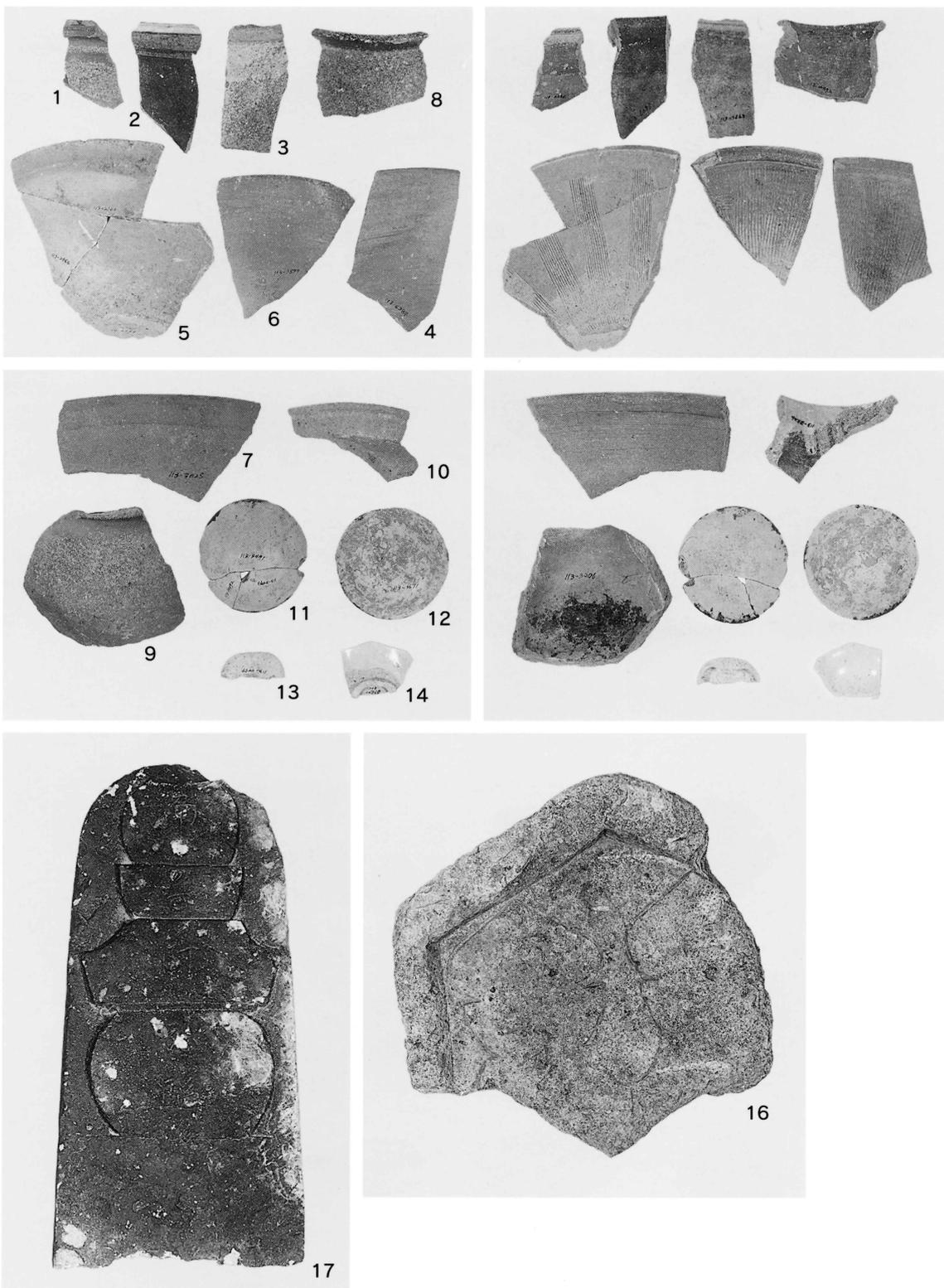
SI5135近景(東から)



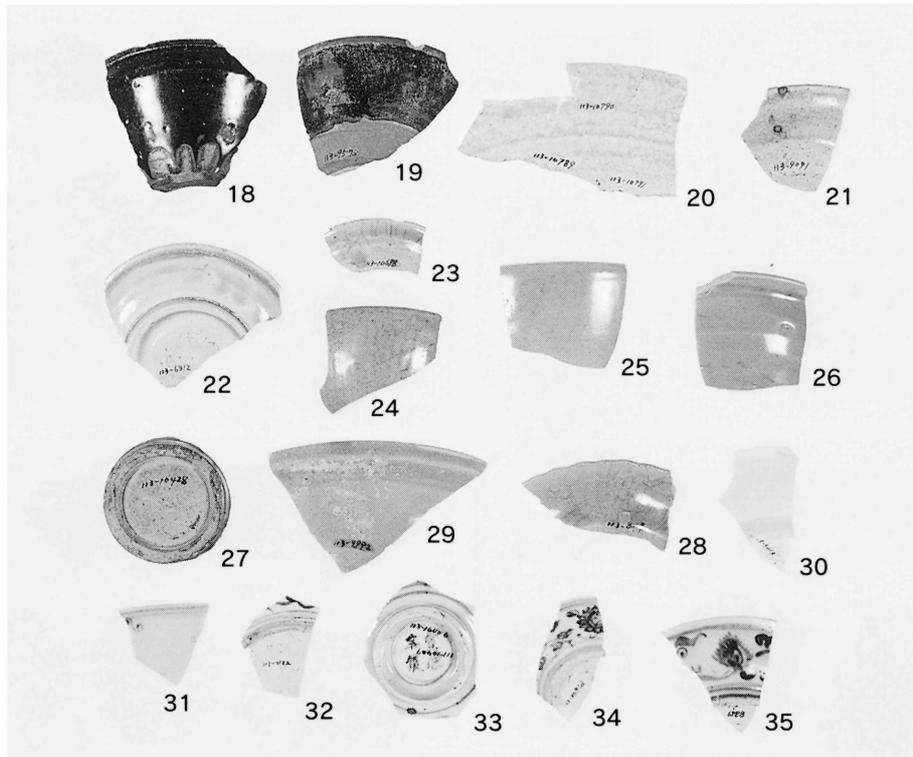
SI5137・SA5136近景(南東から)



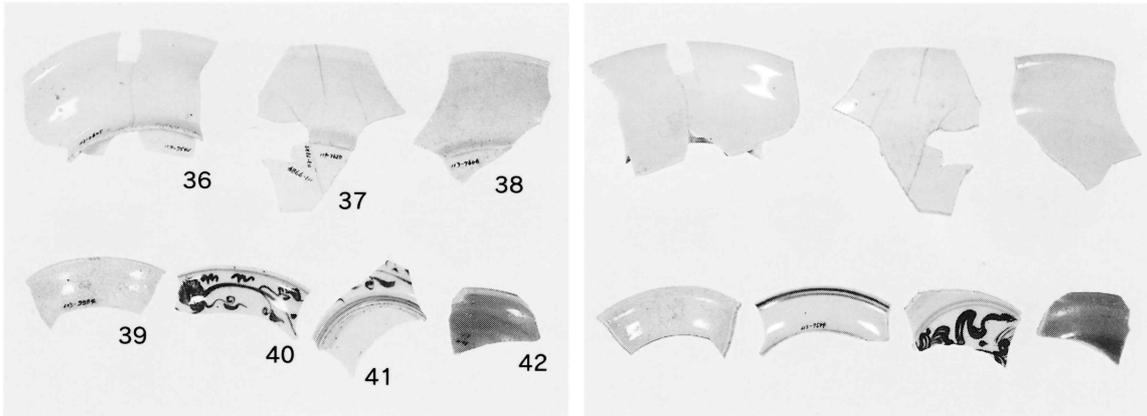
SI5137近景(東から)



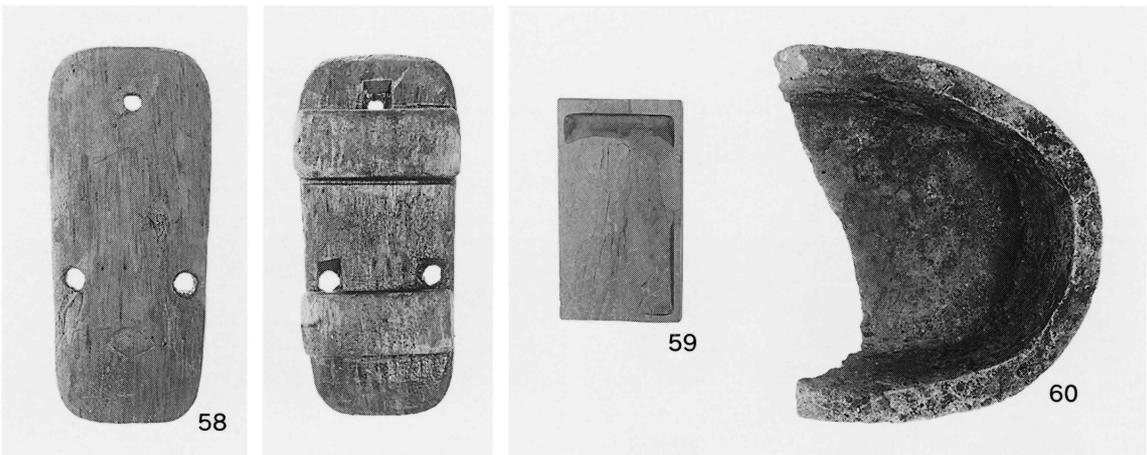
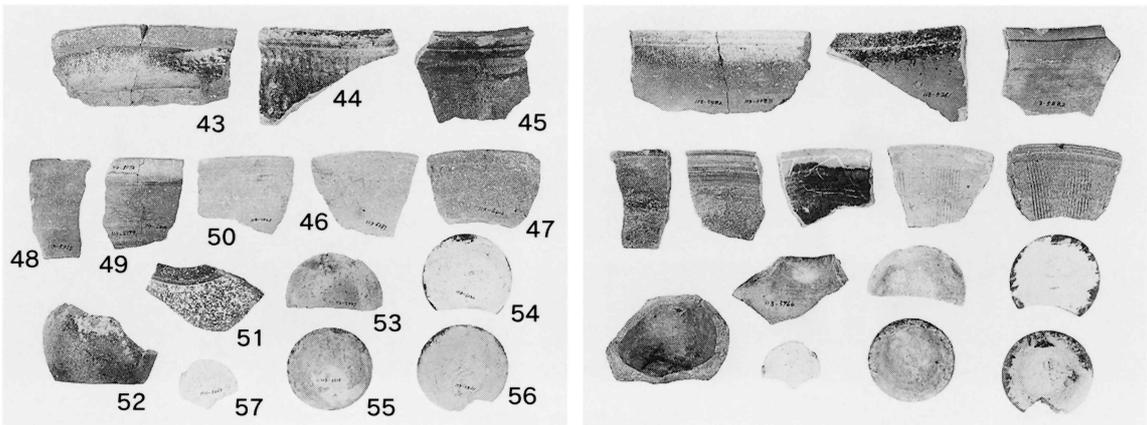
表土層出土遺物



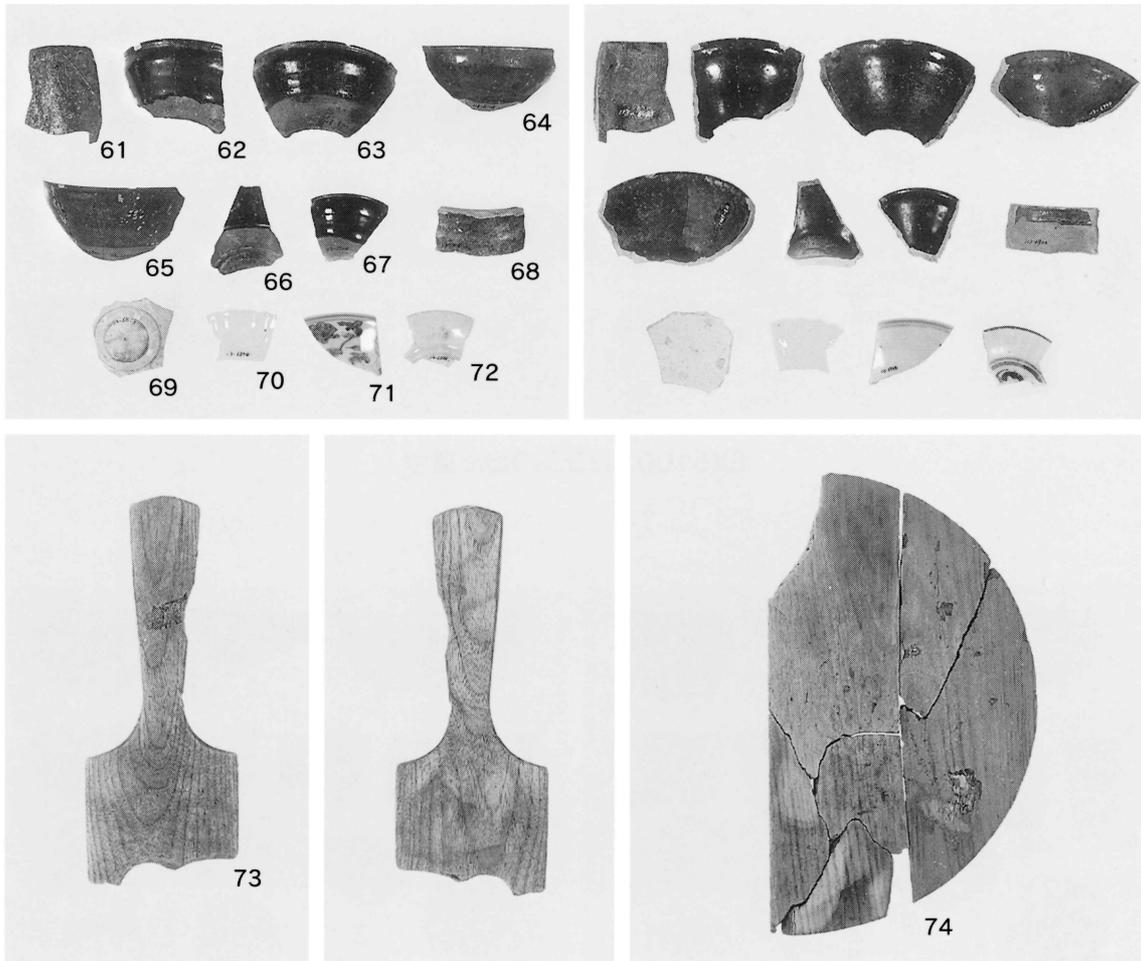
遺構確認面出土遺物



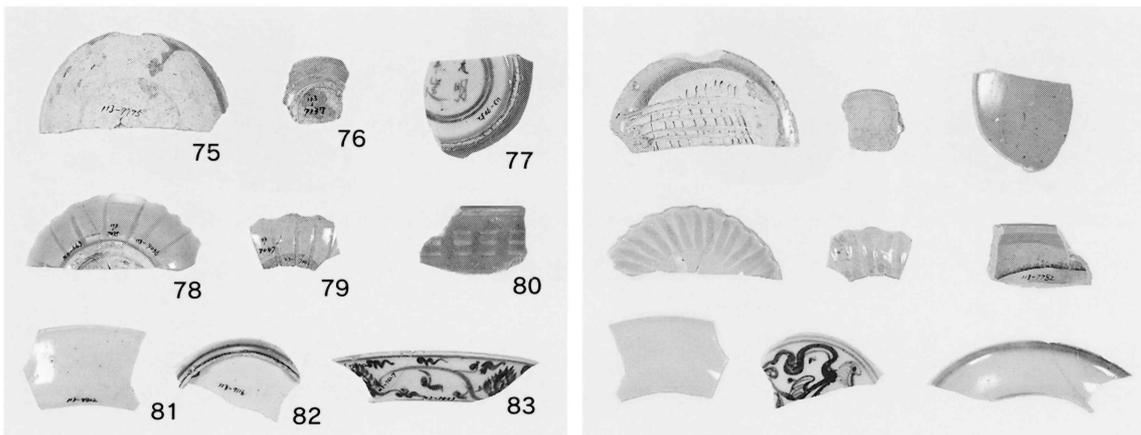
SX5100、SS5090出土遺物



SD5073出土遺物



SE5139出土遺物



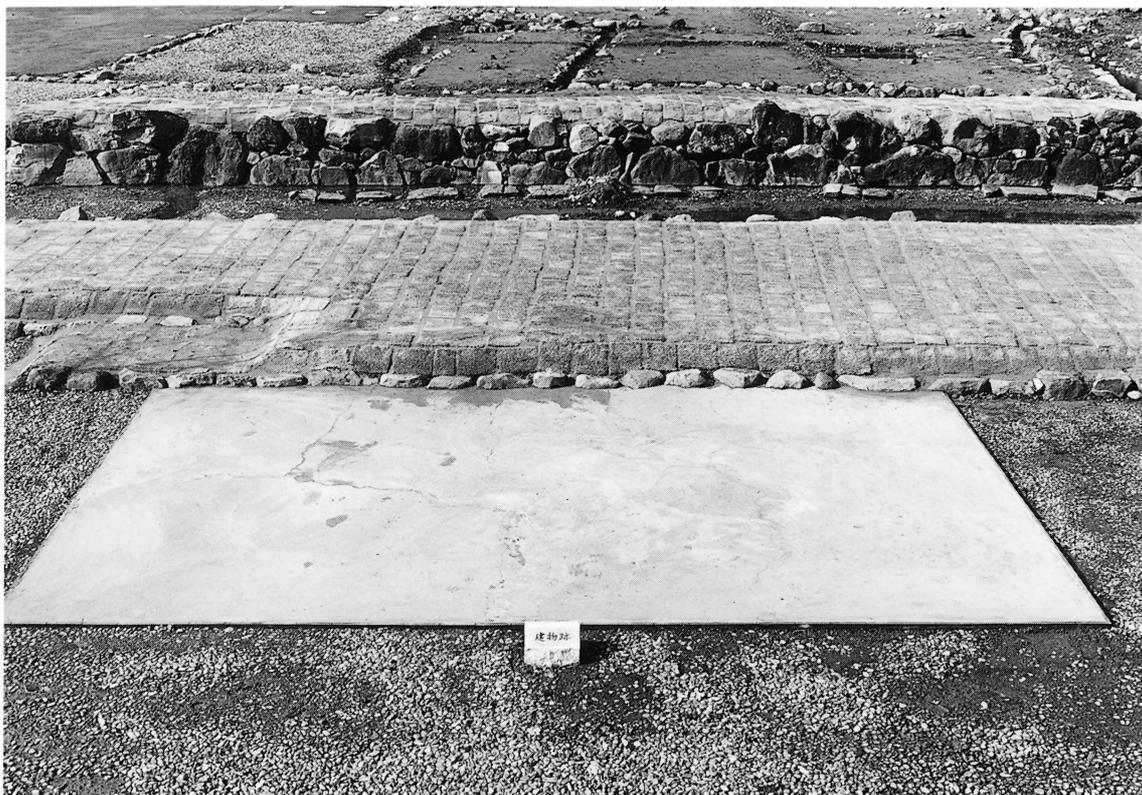
G26グリッド付近焼土層出土遺物



第102次調査地斉藤整備状況(東北から)



建物跡 SB4787・SX4754、溝SD4755整備状況(西から)



下層建物跡SB4767整備状況(東から)



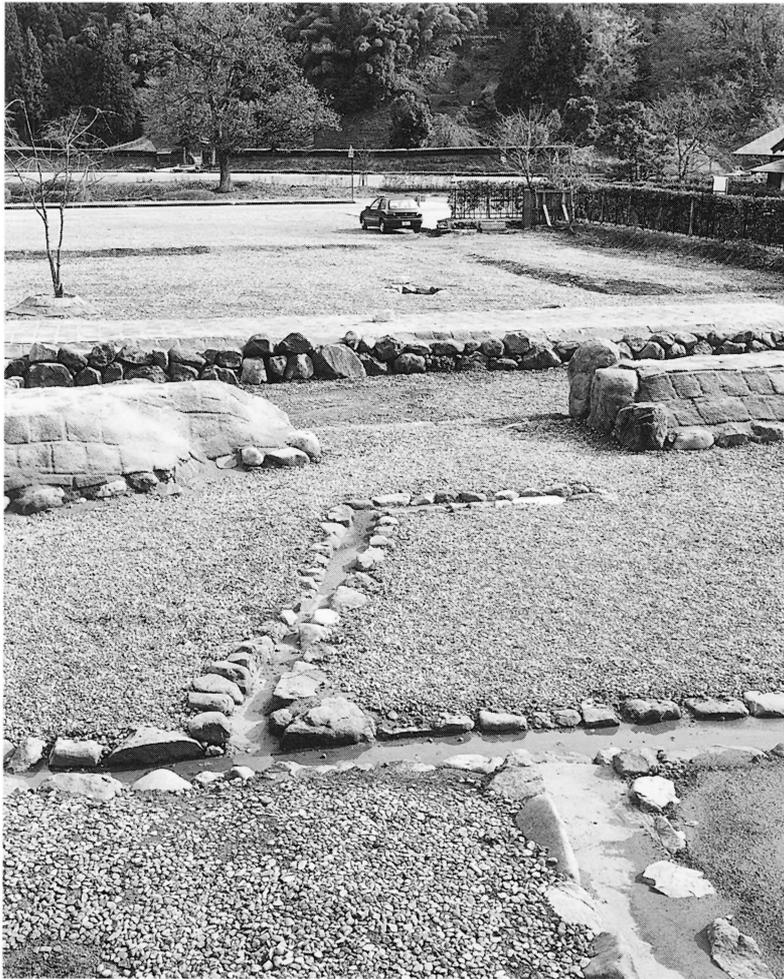
礎石建物跡SB4787整備状況(東から)



土壘SA893・4760・4763整備状況(東南から)



入口SI4750整備状況(東から)



溝SD4752・4753整備状況(西から)



平庭跡SX4758整備状況(東から)

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせき
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡34
副書名	平成14年度発掘調査・環境整備事業概報
シリーズ番	34
編集者名	水村 伸行
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL.0776-41-2301
発行年月日	平成15年3月31日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
第113次調査	福井市城戸ノ内町 字雲正寺	18210	史-31	35° 59' 55"	136° 17' 50"	020402 ~ 021225	1,700㎡	環境整備に伴う発掘調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第113次調査	武家屋敷	室町・戦国時代 (15・16世紀)	道路3、土塁石垣7 門3、井戸4、建物5	越前焼、かわらけ、 瀬戸・美濃焼、白磁、 青磁、染付	道路に区画された 屋敷跡を検出

特別史跡

# 一乗谷朝倉氏遺跡 34

平成14年度発掘調査環境整備事業概報

発行年月日 平成15年3月31日  
編集・発行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館◎  
印刷 児玉印刷株式会社